

洋14-75

「ノア 約束の舟」



2014（平成26）年6月14日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督：ダーレン・アロノフスキー

脚本：ダーレン・アロノフスキー、アリ・ハンデル

ノア/ラッセル・クロウ

ナーマ（ノアの妻）/ジェニファー・コネリー

トバル・カイン（ノアの宿敵）/レイ・ウィンストン

イラ（ノアの養女）/エマ・ワトソン

メトシェラ（ノアの祖父）/アンソニー・ホプキンス

ハム（ノアの次男）/ローガン・ラーマン

セム（ノアの長男）/ダグラス・ブース

ヤフェト（ノアの三男）/レオ・キャロル

2014年・アメリカ映画・138分

配給/パラマウント

<「ノアの箱舟伝説」がはじめて映画に！>

『聖書』は世界で最も多く読まれている書物だし、『旧約聖書』の「創世記」は物語としても面白い。それを描いたセシル・B・デミル監督、チャールトン・ヘストン主演の『十戒』（56年）は中学生の私には相当面白かったし、勉強にもなった。イエス・キリストを描いた映画は『キング・オブ・キングス』（61年）、『奇跡の丘』（64年）、『偉大な生涯の物語』（65年）、『パッション』（04年）（『シネマルーム4』261頁参照）等たくさんあるが、『聖書』を題材とした映画は『天地創造』（66年）くらいで、意外に少ない。また、「ノアの箱舟伝説」（一般的な漢字は「方舟」だが、本作のパンフレットは「箱舟」としているため、以下「箱舟」と記載）を描いた映画は、なぜかパロディ化されたコメディや子供向けアニメが多く、「まともな映画」はほとんどないらしい。そんなテーマに『ブラック・スワン』（10年）（『シネマルーム26』22頁参照）で有名になったダーレン・アロノフスキー監督が果敢に挑戦！

『十戒』の海が割れるシーンは当時の世間をアツと言わせたが、現在では映画づくりの技法として確立しているCGを活用すれば、巨大な箱舟やそれに乗り込む多くの動物たちをイキイキと視覚的に見せることは可能。しかし、ノアの箱舟伝説の映画化が成功するか否かの生命線は、ノアの人間性、つまり、なぜノアが神から選ばれ、ノアの家族と動物たちだけを箱舟に乗せるという「契約」が結ばれたのかを説得力をもって描くことができるか否かになる。

本作は今年3月に全世界で公開され、全米はじめ39カ国でNo.1を達成し、早くもアカデミー賞の呼び声が高まっているそうだが、聖書やノアの箱舟伝説自体に疎い日本ではとりわけその点が重要だ。つまり、日本人は①神が7日間で創造した天地とはどういうもの？②神は何故アダムとイヴを創造したの？③邪悪な蛇はイヴにナニをもちかけたの？④禁断の実を食べたイヴは一体どうなったの？⑤カインとアベルはなぜ兄弟で殺し合いの争いをしたの？等々の物語をどこまで知っているか？ということだ。ノアはアダムから数えて10代目だそうだから、ノアの箱舟伝説を理解するには、私が現在悪戦苦闘しながら執筆している『都市計画法の読み解き方』と同じように、その時代背景をしっかりと理解する必要がある。その意味で日本人には本作の理解は少し難しいかもしれないが、地球上にはキリスト教信者が多いのだから、本作のヒットはまちがいない？いやいや、そう言えるためには、本作における数々の「挑戦」が成功しなければ・・・。

<数々の「論点」をいかに解釈？ その1>

人間の数々の邪悪な行いをお怒りになった神は、自ら創造した人間を滅ぼすことを決意。そこで、ノアにノアの家族と一つがいの動物だけを乗せる箱舟の建設を命じた。そして箱舟が完成すると同時に、40昼夜にわたる激しい雨を降らせて陸地をすべて消し去り、人類を滅亡させてしまった。それがノアの箱舟伝説の「概要」だが、そこには、神はなぜノアを選んだの？をはじめとする数々の「論点」がある。だって、旧約聖書の創世記におけるノアの箱舟の記述は、映画の脚本になるほど微に入り細を穿って書いてくれているわけではないのだから。ちなみに、あの時代の人間社会は「家長制度」だから、聖書にはノアの妻の名前すら書かれていない。したがって、本作でノアの妻にナーマ（ジェニファー・コネリー）という名前を与えたのも一つの「解釈」だ。

他方、カインとアベルの兄弟間の争いとカインによるアベルの殺害は有名なお話。また、そのカインの子孫であるトバル・カイン（レイ・ウィンストン）は「青銅や鉄で道具を作る者」と創世記第4章に記されているそうだが、ノアの物語には登場しない。ところが本作では、神の声を聞きそれのみに従うノアに対して、「人間は自分の力で生きていくのだ」という強力なメッセージを発する危険だが、強い信念をもった人間のリーダーとしてトバル・カインを描き、ノアのライバルと位置づけている。これも、一つの解釈だが、さて、その是非は？

<数々の「論点」をいかに解釈？ その2>

さらに、本作最大のポイントは、神の指示（神との契約の履行）には忠実だが、妻ナーマや3人の子供たちには、ある意味厳格すぎる父ノアの苦悩だ。ノアは邪悪になってしまったトバル・カインたちと離れて生活するだけでも大変だが、ナーマとの間に生まれた子供は長男セム（ダグラス・ブース）、次男ハム（ローガン・ラーマン）、三男ヤフェト（レオ・キャロル）という男の子3人だけに、後継ぎを得るためには彼らの「結婚」が不可欠。もっとも、その点については、難民の避難所に置き去りにされて死にかけていた孤児を拾い養女にしたイラ（エマ・ワトソン）が順調に育っているうえ、イラには血のつながりがないから、長男か次男と結婚することは可能。そう思っていたのに、実はイラは子供を産めない身体になっていることが判明したから大変。他方、イラが長男のセムと仲良くなりそうな姿を見た弟のハムは「俺も早く結婚して一人前の男になりたいから、女を世話してくれ」とノアに頼んできたから、さて、ノアは？

普通ならそれはそれで喜ばしい話だが、神の指示に従って箱舟を造っている今は非常事態。ノアは家族と共に箱舟に乗り込む予定だが、その先に見据えていたプランは自らの家族を最後にした、人類の滅亡。つまり、子供の産めない身体になっているイラ以外に結婚する女がいなければ、ノア家（＝人類）は当然途絶えてしまうわけだが、それを今から見込んで箱舟づくりに励んでいたわけだ。何たる深謀遠慮！

さて、ダーレン・アロノフスキー監督が本作でみせる、そんなこんなの「解釈」をあなたはどう見る？また、その是非は？

<箱舟も洪水も見どころあり！しかし・・・>

6月14日から公開された木村大作監督の『春を背負って』（14年）は、標高3000メートルの大汝山にある山小屋を舞台とした人間ドラマで、「CGなし！」がうたい文句。つまり、重い機材を背負って山に登り、スタッフ全員が山小屋で寝泊まりし、美しい山の姿をそのままカメラで撮ることによってはじめて映画らしい映画が完成するというのが木村大作監督の特長だ。もっとも、同作の宣伝のためにTV出演している彼の言葉を聞くと、それはあくまで自分流のやり方であって、映画におけるCG技術の活用それ自体を否定しているわけではない。大ヒット作となった百田尚樹原作の『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）では、山崎貴監督のCG技術が一つの見モノだった。それと同じように、本作もノアの箱舟や大洪水シーンではCG技術が見モノ。CG撮影と言っても、ノアの箱舟自体は聖書の記述を参考に壮大な現物を作ったそうだから、きっとそれは『男たちの大和/YAMATO』（05年）（『シネマルーム9』24頁参照）における「戦艦大和」よりはるかにカネをかけているはずだ。

本作にはそんな見どころ（魅力）がいっぱいだが、私が賛成できないのは、神によって火を奪われたため、岩になって生きているというウォッチャーズ（番人）のクリーチャーだ。これは『創世記』に出てくる、カナンの地に住むと言われる巨人ネフィリムを映像化したものだが、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズで次から次へと登場したクリーチャーと同じで、賛成できない。韓国ではボン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』（06年）（『シネマルーム11』280頁参照）で作り出したクリーチャーが人気を呼んだが、私はそもそもこの手のクリーチャーは嫌い。5月19日に観た、『ゴジラ（1954）』（54年）における60年ぶりに復活したゴジラは良かったし、7月に公開されるハリウッド版『ゴジラ』（14年）にも期待しているが、これは例外的に確立されたクリーチャーだから賛成できるものだ。次から次へと思いつきのように新型のクリーチャーを作り出すことはやめてもらいたい。そのため、本来なら本作は星5つだが、その減点によって星4つに。

<ここまでやるか！昔からバカ息子には困ったもの・・・>

3人の男の子に恵まれたノアとナーマ夫妻は幸せだが、亀田興毅、大毅、和毅の3兄弟のように、3人が3人も順調に育つのは稀で、1人くらいは親を手こずらせる子がいるものだ。ノアの息子では次男のハムがそれ。ノアが「引きこもり生活」を徹底させ、結婚相手の女も世話してくれないため、ハムはご機嫌が悪い。そこで、1人でカインの領域に入りこんで、「快楽」を求めようとしたが、そこで知り合った1人の女性と深く愛し合うようになると・・・。箱舟の建造が進むにつれて、「神が人類を滅ぼそうとしている」というノアのアピールが、カインたちの間で不吉な予言に聞こえたのは当然。すると、もともとノアと仲の悪いカインは、「もしホントに洪水になれば、俺がノアの箱舟を乗っ取る！」と宣言。ノアとカインとの関係はこのように今や一触即発状態になっているにもかかわらず、ハムが1人でカインの村に入ったりすれば、きっと何らかのトラブルが・・・。

『創世記』に書かれたノアの箱舟伝説によると、当時60歳のノアは完成させた箱舟に、自分の妻と息子とその妻たち計8人と、すべての動物のつがいに乗せたと書かれているが、ダーレン・アロノフスキー監督の解釈による本作のあっと驚くストーリーは、箱舟の中に傷ついたカインが秘かに乗っていたこと。しかも、それに気づいたハムがノアに報告しなかったばかりか、カインのキズの手当をし、食料まで与えたこと。一体ハムは何を考えているの？

さらに、本作の一つの見どころは、洪水が続く大海原の上でのノアとカインとの大アクションになるが、これは自分の恋人をノアから見捨てられたことに不満を持つハムがカイン側について応援したためだ。そんなストーリーにしたためアクション的には面白い映像になっているが、これは聖書に書かれた物語とは違うのでは？と多くの人がそう思うはずだ。もっとも、最後の最後にハムはノアの側につくことになるから「家族の絆」が失われることはないが、ここまでやるか！昔から、バカ息子には困ったものだ。

<なぜ、俺が選ばれたの？それをつきつめていくと・・・>

『グラディエーター』（00年）で第73回アカデミー賞主演男優賞を受賞したラッセル・クロウが、本作ではほぼ出ずっぱりで、何とも頑固な男ノアを熱演している。『十戒』におけるモーゼは、山の頂で光の中から神の啓示を受けて、ヘブライ人をエジプトから連れ出すという使命のために命を捧げた。それと同じように、ノアもさまざまな事象によって神の啓示を受けたが、ノアにとっての最大の問題は、なぜ自分が選ばれたのか、ということ。その答えは、自分は神を信じているということだけしか思いあたらなかったが、3人の男の子しかいない自分が選ばれたことの意味を考えると、さて神の意志は・・・？

前述のように、『創世記』では、ノアと妻と息子とその妻たち計8人が箱舟に乗り込んだとされているから、安住の地が見つければ以降、ノアの家族が繁栄していく可能性が高い。しかし、ノアが一生懸命に神の意志を推測した結果得た結論は、ノア家を最後の人類とした、人類の滅亡。つまり、罪のない動物はすべて生き延びさせるが、罪深い人間は滅亡させるのが神の意思だと解釈したわけだが、そんな息づまる展開の中、ノアはいかなる行動を？

<これぞ究極の選択！しかしノアはいかなる行動を？>

ところが、何と箱舟の中で、妊娠できないはずのイラが妊娠していることが判明。これには、セムとイラ夫妻はもちろん、母親のナーマも大喜びだが、そこで見せたノアの究極の選択とは？それは、男の子が生まれたら将来子供を産むことはありえないからOKだが、もし女の子が生まれたらすぐに殺す、という残酷なものだ。

『創世記』によると、洪水が続いたのは40昼夜だから、いくらなんでもその間に子供が生まれるはずはないが、本作ではそこらは無視して(?)いよいよイラに子供が生まれそうになると、緊迫感は一気に高まって来る。しかも、折悪しく、こんな時にカインが箱舟の中に潜んでおり、ノアの殺害を企んでいることが判明。しかして、カインとノアとの「対決」を経て、イラには何と双子の女の子が誕生することになるが、そこで観せるノアの行動とは？

『創世記』で書かれたノアの箱舟伝説に固執することなく、ダーレン・アロノフスキー監督の解釈によるノアの箱舟伝説をしっかりと鑑賞し、あなたなりの解釈で観れば、本作に見るノアの究極の決断に、あなたは少しはホッとするのでは・・・。